

(3) 感染症検査担当係

調査研究名	研究の概要
<p>札幌市における感染症の流行特性(ヘルパンギーナ)</p> <p>研究担当者：扇谷陽子</p> <p>研究期間：平成 23～25 年度</p>	<p>【目的】 札幌市において 2011 年にヘルパンギーナの定点あたり患者報告数が、現行の感染症発生動向調査が開始された 1999 年以降最も多い 11.00 となった。ヘルパンギーナは、発熱と口腔粘膜にあらわれる水疱性発疹を特徴とする疾患で、A 群コクサッキーウイルス 4、6、10 型などの感染により発症する。この疾患の予後は一般的に良好であるが、熱性痙攣や無菌性髄膜炎を併発する可能性があることから注意が必要である。そこで、今後の流行に際して、予防とまん延防止のための情報発信を目的に、札幌市におけるヘルパンギーナの流行状況の解析を実施した。</p> <p>【方法】 対象は、感染症発生動向調査において 1999 年 4 月(第 13 週)～2013 年 12 月(第 52 週)の期間に、札幌市の小児科定点医療機関からヘルパンギーナ患者として報告のあった 18,167 名とした。患者情報は、厚生労働省の「感染症サーベイランスシステム」および「感染症発生動向調査事業年報」より入手した。</p> <p>【結果】 札幌市における週毎の定点あたり患者報告数について、例年夏季にピークとなることが確認された。患者報告数は極めて多くなる年が散見され、2001・2006・2010・2011 年は警報レベル(開始基準値:6)に至る報告数となった。これらの年は、短期間に流行が拡大し、終息も急速であったことが確認された。 年齢別患者報告割合について、例年 1 歳の報告割合が 20%以上と最も高く、次いで 2 歳が高かった。3 歳～9 歳について、年齢の増加とともに、報告割合が低くなる傾向が認められた。</p> <p>【考察】 今回の調査の結果、流行する季節、流行時の患者報告数の増減の状況及び患者年齢の傾向を確認することができた。今後も、同様な調査を継続することにより知見を蓄積し、感染予防の注意喚起などの啓発に役立てていきたいと考えている。</p>